等語線について

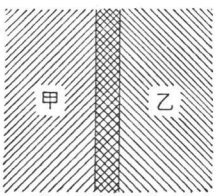
池上二良

方言分布の研究において取扱う等語線(isogloss)とは、或一つの方言特徴の分布する地域の外側のふちに引いた線であるという定義に基いて、私はつぎの点を強調したい。なおこのような等語線の実例については、拙稿「長野県木曾地方におけるサ行イ音便形とヨに終る命令形の分布」(「信濃」五ノ四昭和二八年)を参照されたい。

すなわち、等語線とは、それが示す、たとえば甲(たとえば「かまきり」を意味する単語トオロオムシ)という方言特徴の分布地域と、その方言特徴の分布しない地域との境界線ではあるが、しかしその定義には、等語線がそれが示す甲という方言特徴の分布地域と、それと対比的な別の乙(たとえば、「かまきり」を意味する単語オガミムシ)という方言特徴の分布地域との境界線であるということは含まれていない。一つの等語線とはただ一つの方言特徴に関するものである。すなわち甲という方言特徴の等語線は、それと対比的な乙という方言特徴にも関するというものではない。甲、乙二つの方言特徴には、それぞれの等語線が存するのである。

甲乙二つの方言特徴の分布地域の境界線とは別に、このように定義された等語線が、方言研究には有益かつ必要であると考えられる。なぜならば、対比的な甲乙二つの方言特徴の分布地域が、もしも一線を劃して互に接しているならば(第一図参照)勿論甲乙二つの方言特徴のそれぞれの等語線は一致し、それは両方言特徴の境界線となるのであるが、しかし甲乙二つの方言特徴の分布は、周辺の地域では互に重り合っている場合がありうるからである(第二図参照)。その場合には、その二つの方言特徴の等語線は互に入組み、上の場合のような厳密な意味での境界線は求めることはできない。強いて境界線を求めるとすれば、そこには近似的な境界線しか引きえない。云うまでもなくこれを引くには、恣意的になるのを避けるために、或一定の基準を立ててそれによるべきであろう。方言特徴の境界線と区別して、別にそのような等語線という概念が重要であることは、ここに述べた点からあきらかであろう。

第一図



第二図

方言分布の調査研究において、まず調査せねばならぬのは、かかる境界線よりも、むしろ等語線であると云っても必ずしも過言ではなかろう。等語線に関する事実をたしかめてこそ、それによってかかる境界線をあきらかにすることができよう。

等語線についてここに述べたことは、勿論多くの学者によって、またすでに考えられていることと思う。しかし一方では、その点が必ずしもあきらかでないようである。私が以上の点を改めて強調したいのは、方言の調査研究が進歩して、その方法と結果がますます精密になりつつある今日、このような点をあきらかにしておくことが、方言研究の上に特に必要なのではないかと考えたからである。

(本稿は二月五日の日本言語学会東京例会の討議の際読んだ原稿を補訂したものである。)

——群馬大学助教授——